



「別離」 英語題「ナデルとシミン-別離」

評 前島常郎

●ストーリー

イランの首都テヘランで暮らすナデル（シャハブ・ホセイニ）は、妻シミン（レイラ・ハタミ）と11歳（イランでは中学生）の娘テルメー（サリナ・ファルハディ）、そしてアルツハイマーで介護が必要になったナデルの父と4人で同居している。

オープニングで、家庭裁判所の調停員の前でナデルとシミンは離婚調停の話し合いをする。理由は、シミンが娘の将来のために外国で暮らそうと主張するが、ナデルは老齢の父を連れて行けないと真っ向から反対したからだ。

シミンは、口論になると興奮しがちなナデルとは穏やかに暮らせないと実家に帰る。ナデルは父の介護をしてもらうために家政婦ラジエーを雇う。

しかし、ある日ナデルが帰宅すると、父が手足を縛られたまま寝室の床に倒れていた。なんとか一命は取りとめたが、ナデルは家政婦に腹を立て、解雇を言い渡し手荒に追い出す。しかし、そのはずみで彼女は階段で倒れ流産してしまった。ナデルは殺人罪に問われることになる。イスラム法では、胎児は受精後120日目以降は人間とみなされる。裁判官は、ナデルが家政婦の妊娠を知っていたのか、また、本当にナデルの乱暴が流産の原因と言えるのかを追及していく。

●お勧めシーン

老齢の親の介護、夫婦の言い争い、思春期前の娘の進路の悩みなど、家庭を持つ者ならば、国境を越えてだれもが抱えう

る悩みごとを扱っている。家政婦にからむもめごと、文化の違いを問わない。女性が必ず髪をスカーフでおおったり、家政婦が老人の下の世話をする前に、聖職者に電話をして意見を聞いたり、見慣れぬ習慣はあるものの、それらを越える人類共通の悩みが胸をつく。老人から子役まで真に迫る演技を見せる。

「別離」というタイトルにある通り和解よりは破局に向かう家庭が舞台なので、模範例を見つけることは難しい。むしろ、反面教師として心に留めたいことが多い。例えば、夫婦の話し合いだ。調停員の前でさえ相手の言い分を聞くよりも、自分の言い分だけを大きな声で主張し合っていたのでは、妥協点を見出すことはとうてい無理だ。家政婦の夫ホジャットも、興奮すると声が荒くなり、すぐに手が出る。聖書も「おこりっぽい者と交わるな。激しやしい者といっしょに行くな」箴言22章24節「怒るにはおそいようにしなさい」(ヤコブ1章19節)と警告する。感情のコントロールは、平和な家庭生活の大きなポイントだ。

離婚を考えている父母に挟まれた、感じやすい時期の娘テルメーが心を痛める姿も注目点の一つ。

しかし、最大のポイントは小さな「嘘」、そして人としての良心だ。イスラムの国イランらしく「コーランに手を載せて誓う」という習慣の重みが、ストーリーの展開の要になる。たとえ自分と家族を守るためであれ、嘘は嘘なのだ。

私も、「神の前に真実であること」をどれだけ真剣に考えているかと心を探られた。

●もう一言

「外国で子どもを育てたい」というシミンの主張が、いまひとつ説明不足に思えるのは私だけだろうか。

介護に必要な老人の数が増えている割には介護施設が非常に少ないというイランの貧困な福祉の現状が明される。

夫婦間、また利害が対立する男同士の口論の場面は、大声や暴力とともに強い印象を残す。止めに入る第三者がいたおかげで大事にならずに終わるものの、現実のDVの被害者には、それだけでも刺激が強すぎるだろう。

それにしても、現代家庭のシリアスな一面を描いてリアリティーの高い作品である。



2012年 イラン映画 アカデミー賞外国語映画賞他、全世界で90冠の賞を受賞
監督◆アスガー・ファルハディ
出演◆レイラ・ハタミ、シャハブ・ホセイニ
上映時間◆123分 全国で順次公開中